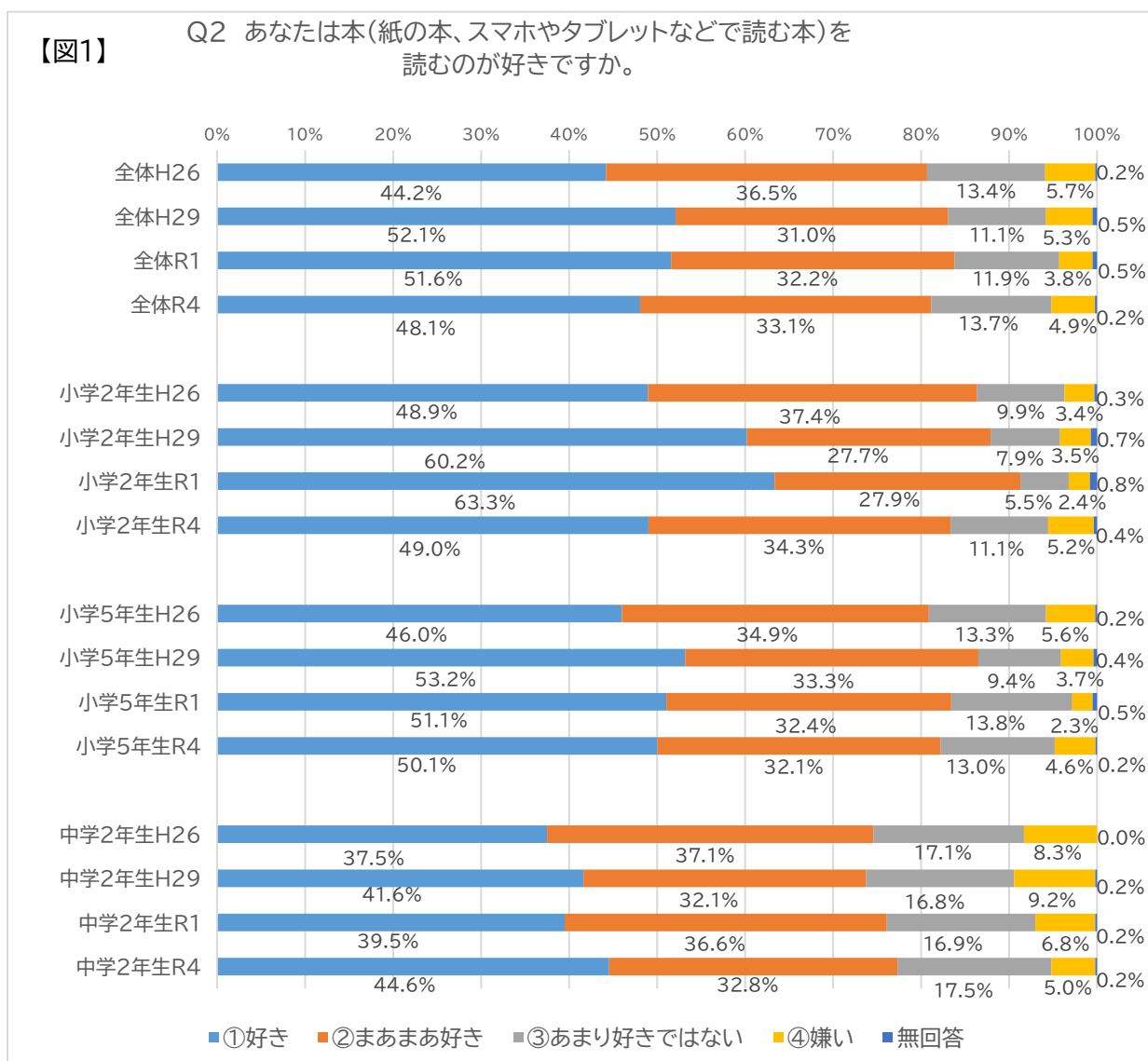


現状と課題・今後の方向性

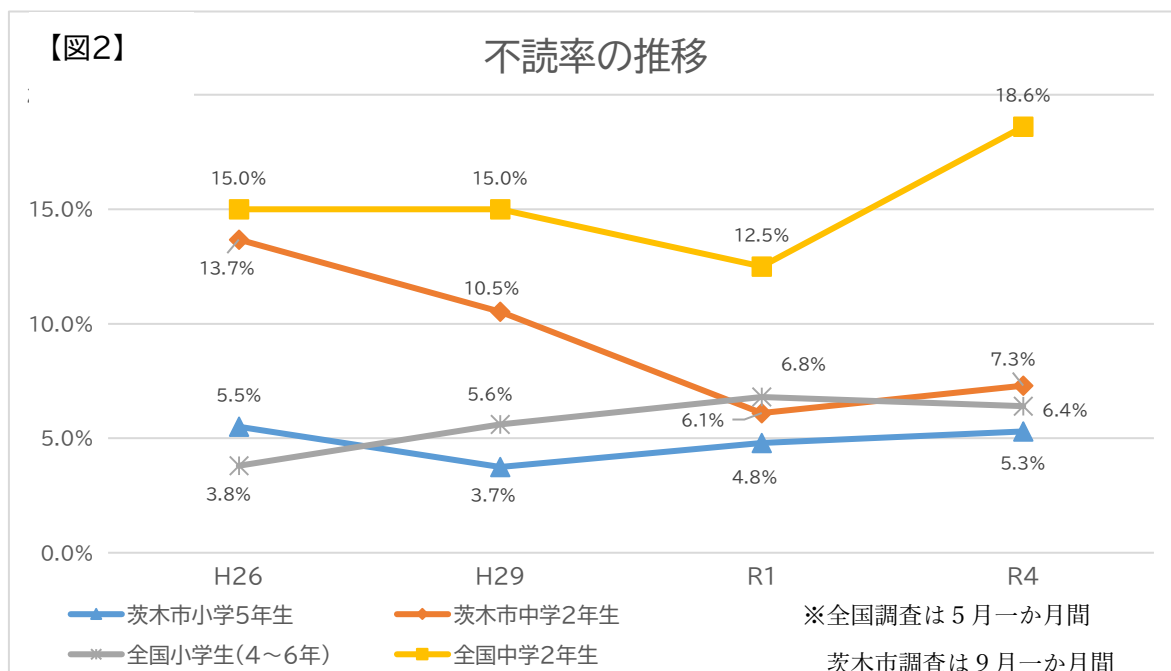
前回令和元年度の調査以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により、子ども達の生活や読書環境にも様々な変化や影響がありました。

今回の調査結果と、小中学生の半数を学校単位で抽出した過去3回の調査結果を単純に比較することは難しいですが、第1回調査時から継続して見られる傾向がありました。

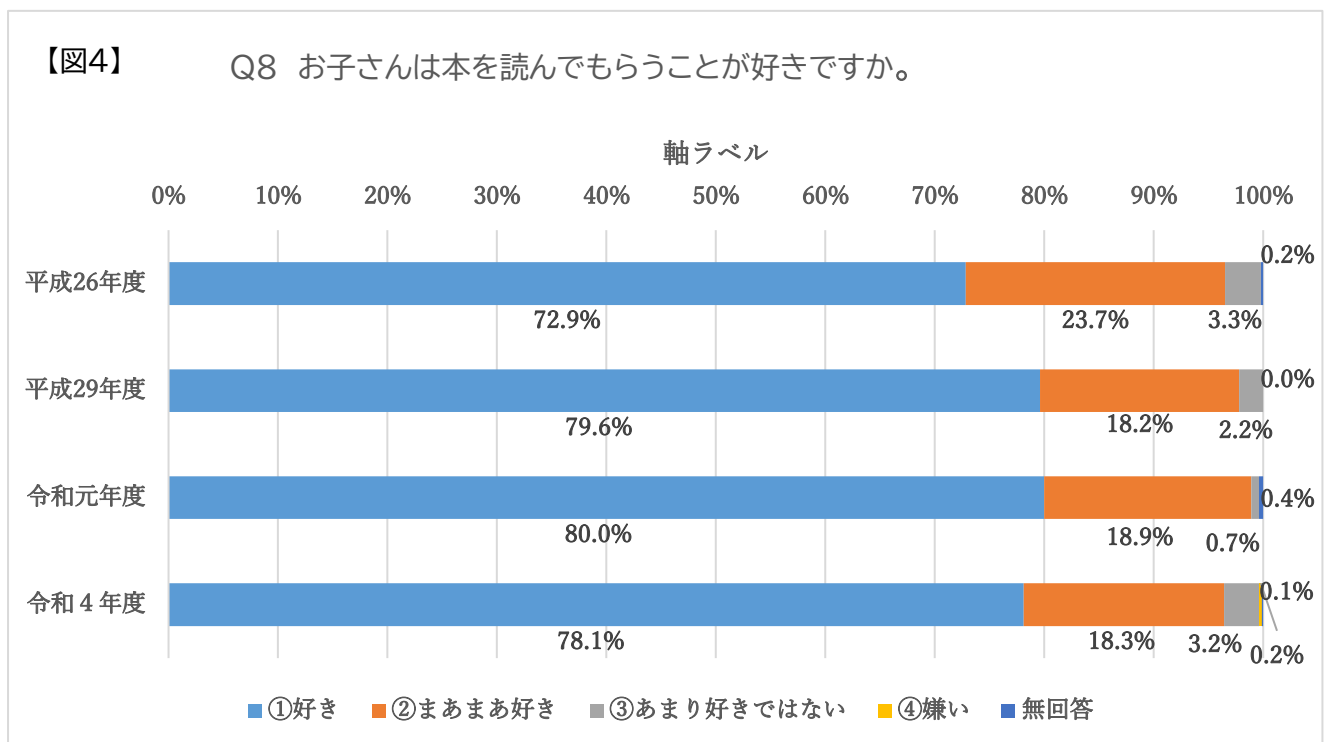
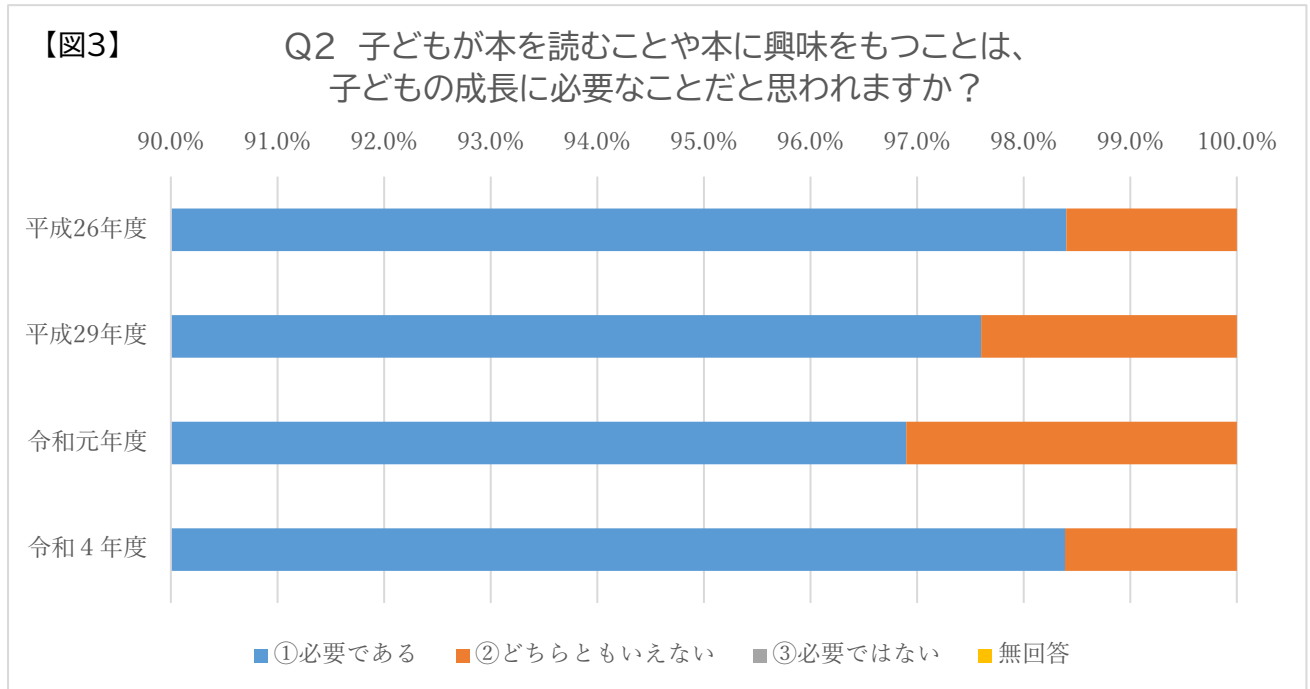
本市の小中学生において、「本を読むのが好きですか」という質問への「好き」「まあまあ好き」という回答は、平成26年の第1回調査時から継続して8割以上、中学生についても7割以上を保っています(図1参照)。



1か月に1冊も本を読まないと回答した児童・生徒の割合「不読率」についても、茨木市の数値は平成26年度第1回の小学5年生を除いて全国を下回る状況が続いており、令和4年度も同様です。令和元年度と比較すると、全国においては中学生が大きく上昇していますが、茨木市は微増にとどまっています。(図2参照)。

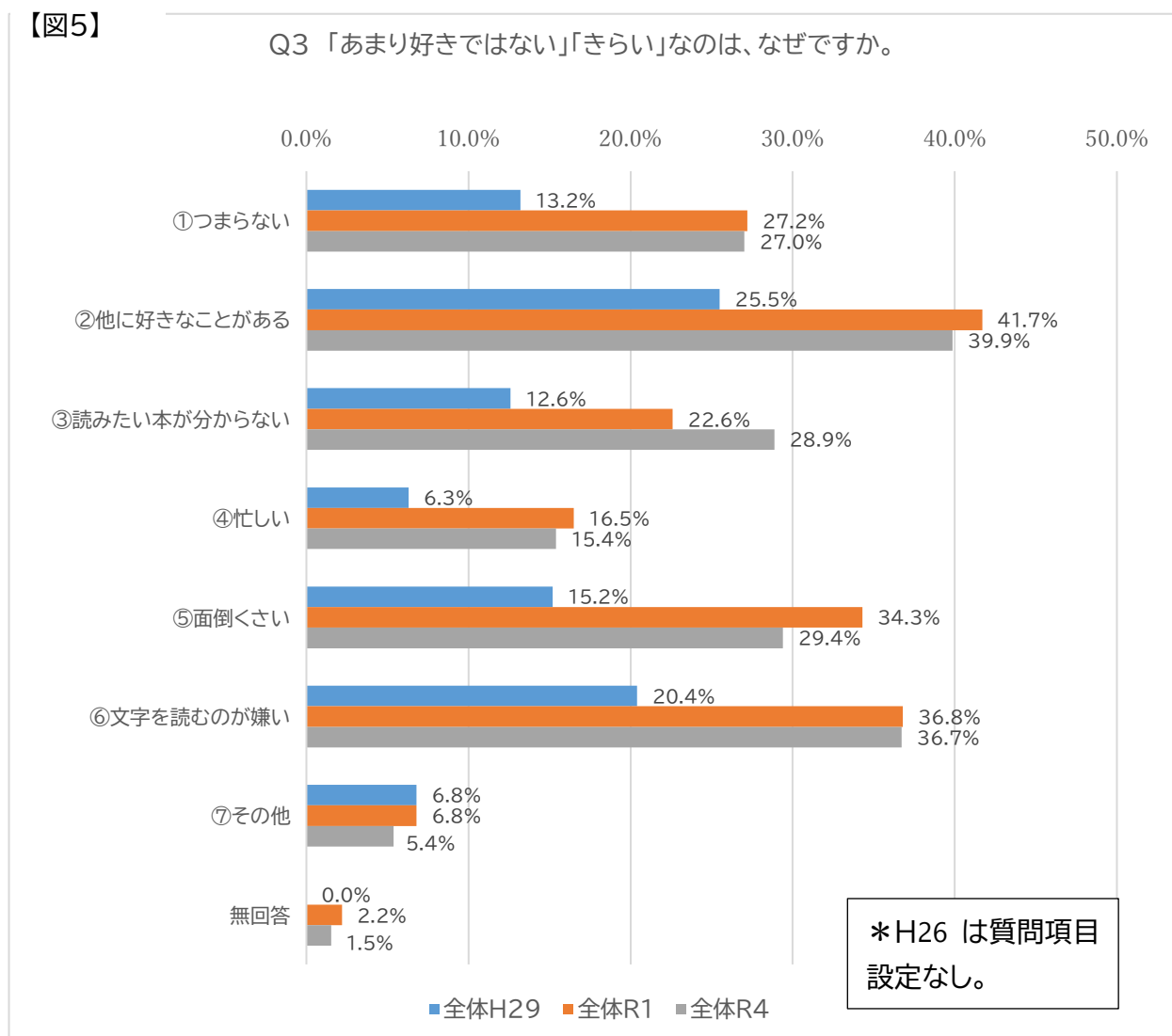


4 歳児の保護者への調査結果では、読書活動が子どもの成長に必要なものであるという保護者や、本を読んでもらうことが「好き」「まあまあ好き」な子どもたちの割合は継続して 9 割以上を保っています(図 3、図 4 参照)。



この現状は「茨木市子ども読書活動推進計画に基づいて市全体として継続して取り組んできた結果であり、今後も家庭・地域・行政が連携して引き続き取り組んでいく必要があります。

小中学生の 2 割程度は「他に好きなことがある」「文字を読むのが嫌い」「読みたい本がわからない」「つまらない」などの理由から本を読むことが「あまり好きではない」「嫌い」と回答しています。その中でも、「読みたい本がわからない」と答える小中学生の割合が増えています。それぞれの児童・生徒の興味関心や発達段階・特性に応じた図書と出会えていないことが考えられます(図 5 参照)。



「読みたい本が分からない」という点に着目すると、様々な本を紹介することや、興味関心に関係なくとも本に触れる機会を創出することで、読みたい本が見つかるようなきっかけづくりの場を設けることが必要となります。

例えば、「おにクルぶっくぱーく」では、本に親しんでいない子どもたちも、イベントや何気なくおにクルに来館した際、偶然新たな本と出会うことが期待できます。

これらのように図書館からの本の紹介以外にも、イベント等をとおして、様々なきっかけづくりに努めてまいります。